

「もしかしたら死ぬな」と思った。「来るんじゃないか」と後悔していた。眼の口を開けて覗いていた。真夜中の頃だと思ふ。私は四國沖を南西に向けて航走している。叩き付ける風雨、襲い掛かる波浪、既に体力といえる物は消えていた。

西宮港を今日、昼前に出帆した。メンバーは航海馴れたクルー3名を含むヨット仲間8名、48名の中型クルーザー、4日間の予定で硫黄島(別名鬼界島)まで片道約800キロの外洋クルーズと洒落込んだ。九州方面に低気圧が在り、前線が発生していた事は知っていたが、ビール片手に揚々たる出港だった。室戸岬沖を通過する辺りから雲と海の境目が無くなり、私は前線を超える為スキッパーに就いた。

夕方、足摺岬沖を通る頃、海はその形相を一変させていた。波高は優に10メートルを超え上下左右に艇を弄んだ。波の頂に押しやられる

## 藤田 國廣

# 産業春秋

題字 今井 敬氏

と、スクリューは虚しく空を切り、ステアも利かない。船体は真横に押し倒され、20度もあるマストの帆先は荒々しく水面を切裂く。見上げる海は頭上で怒濤の雄叫びの下で平伏たのであった。4人ずつ3時

も出来ない。血の混じった胃液が込み上がる。食べ物を口に嚙り入れるが直ぐに嘔き出される。体温は下がり、手足の感覚は無い。誰も無口で緊張と恐怖で動きすらしめない。眼前で死が嘲り笑い、死が恫喝していた。ゆっくりとした穏やかな死、御伽話である。一瞬先の死、1ヶ月先の死を見詰めていた。

交代が来てキャビンに飛び込む。カッパを脱ぎ捨て濡れたままベッドへ飛び込み身体を縛る。吐き気がひどい。骨は軋み、筋肉は呻き、疲労は極限に達し、不安



## 黎明

も痛みもどこか他人事の様にか、きれいなお花畑を視たとかいふ訳ではない。そんな臨終体験では無いが現実の「死」と事実の「生」を体験した。そして精気を取り戻した小艇は再び相模の海原に落ちた1粒のルビィの様な硫黄島へノットを上けて行った。数年前の夏の事である。

交代でデッキ番となる。足を踏み外せばそのまま海の深淵となる。身体に二本のハーネス(命綱)を巻き、一本掛けては1歩と進む。間断なく艇はローリングを繰り返し、10数分を船先から落下し、又飛び上がった。行く。雨粒、波飛沫は小石の様に痛く、風は狂い、息の地獄絵に向かい立った。

(メタルドゥ社長)